

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

コミュニティをつくるには、 どうしたらいいのだろうか？

※本連載、本誌HPに無料掲載中！

松田 道雄

提案：日頃、社会教育や公民館で語られる「コミュニティ」ということばについて、じっくり思索してみませんか？

社会教育行政をご担当されている皆様にとって、コミュニティということばは、日頃からよく用いられているのではないかと思います。「地域コミュニティの喪失」という表現は挨拶の中でもよく言われます。公民館の研究大会などの挨拶文には、人口減少、少子高齢化、地域コミュニティの喪失といった課題に対して「3つのづくり」がよく語られます。「人づくり、つながりづくり、地域づくり」です。では、コミュニティとは具体的に一体何なのでしょう？ 私たちはコミュニティということばをどのようにイメージしているのでしょうか？ コミュニティと「3つのづくり」はどのような関係にあるのでしょうか？

あらためて、筆者がそれらを思索したのは、夕方18時から行っている、筆者も担当している大学院（公共社会学専攻）の授業に参加した時のことです。その回は、社会学、文化人類学の先生がそれぞれの専門分野の研究から、東日本大震災後の復興と地域社会について30分ずつのミニ講義がありました。社会学の先生は、宮城県内の被災自治体の復興プロセスの相違を、自治体主導の事業と地域住民のコミュニティ形成という2つの立場から比較検討されました。文化人類学の先生は、宮城県沿岸部の、ある地区の祭りを通して、コミュニティを論じました。その地区は仙台圏からも遠いため、住民はその地から離れてしまい、人が住んでいなくなってしまうが、祭りの時になると人が集まり、祭りによるコミュニティが残っていると論じられました。

どちらの先生の話にも、学問分野は違えど、コミュニティとすることは当たり前に出てきました。その話を聞きながら、筆者が思いを巡らしたのは、「そもそもコミュニティとは何なのか？」「各人はどのようなイメージでコミュニティということば（概念）をとらえているのか？」「コミュニティはどうすればつくられるのか？」といったことです。社会学や文化人類学の学問ではコミュニティを論じることはあっても、コミュニティを「つくる」という能動的な行為は役割ではありません。社会学の先生は、新聞記事や行政の統計、記録、インタビューなどさまざまなデータから分析し、見方やあり方を論じます。文化人類学の先生は、文化人類学は直接社会に役立つことを研究しているわけではない、と言います。それらの学問に対して、社会教育や生涯学習の実践現場である公民館などでは、先の「3つのづ

くり」や「コミュニティづくり」といった、「つくる」ことが活動目的にあります。

社会教育関係の読者皆様は、どれくらい「つくる」ことを目的に明確な事業のノウハウを立案展開なされていますでしょうか？

コミュニティを辞書で調べると（ネットを検索すると）、「共同体」と出てきます。共同体とすることばは「かつての地域コミュニティ」と言うことばの姿が連想されます。農村地帯や町中の商店街の暮らしなどを思い浮かべながら、皆が顔見知りで声かけしたり、共同作業をしたり、いざとなれば助け合えるような人間関係や集団の緊密性を、皆様も想像されるのではないのでしょうか。

それが時代を経て、農家や商店街の子どもは跡を継がずにサラリーマンになり、家の生活と働く場所（会社など）は分離し、店はコンビニやスーパー、チェーン店、ネット通販などの企業

になり、個人それぞれが時間さえあればスマホを見て、隣の人と話し合う姿も見かけなくなり、地域で「共に」生活しているという感覚はどんどん少なくなっています。学校教育でいい点数をとった生徒は、都市の大学に進学し、全国的な企業に就職して住まいを定め、地元には帰ってきません。そのような「大きな社会の変化」の中で、地域コミュニティをつくる（再生する）ことは容易なことではないでしょうが、概念的に言えば、「3つのづくり」の中の、人と人の「つながりづくり」を方法論として、それを通して、地域に生きる「人づくり」が行われ、地域に生きる人々が元気に暮らし、地域社会が持続する全体が「地域づくり」ということになるのではないのでしょうか。「人づくり」とは「ものづくり」のイメージではないという指摘もあるかもしれませんが、地域社会における

「人づくり」とは、農作業や地域行事のやり方を徒弟的に参加し修得しながら「地域生活に自立して生きる姿として」一人前になる」といったことでしょうか。以前は、「地域づくりは人づくり」というように、2つのづくりが語られてきました。「つながりづくり」ということばは最近出てきたことばです。時代的な視野から見ると、特にスマホでSNSの利用が普及した頃から、孤立化、孤独化ということばも言われ、それらの課題に対することばとして、「つながりづくり」ということばが出てきたようにも思います。

しかし、見方を変えると、直接地域で隣り合って暮らしている生活ではつながりが希薄になつたかもしれないが、スマホを窓口にしてネットでつながるコミュニティをつくっている人も多くいるかもしれません。そのつながりは、隣にいる人には見えないので、孤独に一人であるように見えます。要するに、そのコミュニティに入っていない人にとっては、他のコミュニティの姿がわからないのかもしれない。英語のコミュニティの語源を分厚い英語の語源辞典で調べると、ラテン語で「共通」を意味することばがありました。メンバーどうしが「共通に」わかり合える様式でつながる人どうしの集まりがコミュニティなのでしょう。教育学も含め、先の社会学、文化人類学など、各学問分野で日中、仕事として大学などで研究している先生方にとっては、その仕事の共通のスタイルは「論文を読む、書く」というものです。しかし、日中、論文作成のために時間を割いて関係文献を調べ、調査し、資料や文章を練り上げるといったことは、日中行政事務に追われている公務員の方や、講座や地域行事などで住民との対応に追われている公民館職員にとってはできないことですので、学問分野の研究者

が話すこと(論じること)は、「よく理解できない」「私の仕事には直接関係のない机上の論のように聞こえる」ということもよく聞きます。

学会はアカデミック・コミュニティとも呼ばれますが、研究者どうしが「共通」するし方(論文など)でつながるコミュニティをつくっているとも言えます。地域生活のコミュニティと異なった、趣味やテーマごとのコミュニティと同じ性質のものとも言えるでしょう。地域生活のコミュニティは、論文を検証し合うような研究者のコミュニティのあり方とは異なることは察せられます。では、地域生活で人と人が日常的につながる窓口になるのは何でしょうか？

それは、会話です。会話を意味する英語のカンパセーションの語源を調べると、「付き合う」というラテン語から生まれ、「囲まれて生活する」「親しみ、親密さ」を意味し、中に「生き方、ふるまい」とい

う意味になり、その後「会話」の意味になったとあります。

これに類似する英語のコミュニケーションの語源は、ラテン語で「共有する」から生まれ、「分かち合い」などを経て、現在の「情報の伝達」といった意味になったとあります(拙著『等語』9章「コミュニケーション」ではなく、カンパセーション！新評論、2021年)。

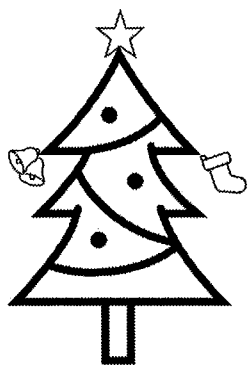
そうしてみると、まさに地域のコミュニティづくりの鍵は、「会話をする機会や場をつくり、住民どうしの会話(の量)を増やす」ということが一つあげられるのではないのでしょうか。

公民館研究大会などでの事例発表では、各公民館で様々な行事などを行って、地域住民の交流がはかられている発表がよくなされています。きっと、それらは、その地域でのコミュニティづくりの重要な役割を果たしているのでしょう。しかし、さらに希望を言えば、イベント会社などが行うイベントとの違い

を明確にするためにも、単に集客数だけを事業評価に示すことだけでなく、「つながりづくり」「人づくり」として大切な、地域住民が準備して行った行事によって、どれくらい、その後の住民どうしのつながりができたか、運営した人たちが成長したかなどの記録(証(あかし))も知りたいたところでは、そこそが、「つくる」事業の役割と事業評価になるのではないのでしょうか。

日本語で会話にかかわる古いことばとしては、「雑談(ぞうだん)」ということばが平安時代の記録にあると国語辞典にありました(『等語』3章「国は会話を教えられるか」。雑談とは、「とりとめのない、さまざまなことばです。平安時代には、もちろんコミュニティということばはありませんが、それに相当する人々の姿はあったことでしょう。それをつくり出していたのが「雑談」つまり、会話だったのではないのでしょうか。社会教育ということばも平安時代に

はありませんが、その原型になるような姿は何かしらあったかもしれません(学校はなくても)。次年度に向けて、この冬、社会教育関係者がよく使う「コミュニティ」「コミュニティをつくる」ということについて、仕事の合間に一息ついて、考え深めてみることもいかがでしょうか？



(まつだ・みちお 皆様の地域の「コミュニティづくり」応援します！)

尚綱(しょうけい) 学院大学 教授(宮城県)

連絡先: m_natsuda@shokei.ac.jp

※本連載、本誌HPに無料掲載中!